

国際オリンピック・アカデミー 第47回国際青年セッションに参加して

成瀬和弥

1. はじめに

国際オリンピック・アカデミー(以下、IOAとする)は、オリンピズムの普及・教育とオリンピックについての研究を主たる目的とする国際機関である。IOAは、古代オリンピック発祥の地であるギリシャ共和国に1961年に近代オリンピック創始者のクーベルタンの遺志を継いだカール・ディーム(ドイツ)とイオアニス・ケチアス(ギリシャ)によって設立され、現在、その管理・運営はヘレニック・オリンピック委員会が担当している。

IOAの本部はアテネにあり、研修施設は、古代オリンピックが行われたオリンピアにある。古代オリンピックの遺跡や博物館から徒歩で5分ほどの距離にある研修施設には、約1000人収容できる宿泊施設のほかに、サッカー場、陸上競技場、バスケットボールコート、バレーボールコート、テニスコートプール、講堂、図書館などがあり、素晴らしい環境となっている。

IOAは毎年、①青年、②大学院、③教育者、④NOC、NOA、IF、NFの役員、⑤ジャーナリスト等を対象にしたセッションを開催している。筆者は、2007年6月19日から7月3日の期間に行われた国際オリンピック・アカデミー第47回国際青年セッション(以下、青年セッションとする)に参加することができた。本稿では、その概要を報告する。



写真1 IOA 研修施設 (オリンピア)

2. 国際青年セッションの概要

青年セッションは、各国のオリンピック・アカデミー(NOAA)から20歳から35歳までの男女が派遣され、オリンピズムに関して理解を深め、世界各国の若者と交流し、オリンピズムを世界に広めることを目的とした取組である。

オリンピック憲章によると、オリンピズムとは人生哲学とされ、スポーツを通じ、フェアプレー精神のもとに身体と精神を鍛錬し、若い人々が文化や国の違いなど様々な差異を超えてお互いに理解し合い、友好を深め、さらには世界の平和にも貢献していこうとするものである。オリンピズムを上記のようにとらえると、青年セッションは、まさにオリンピズムの具現化を目指した取組ということができる。

今回の青年セッションには、102の国と地域から169名が参加した。日本からの参加は私だけであった。日本からこのセッションに

派遣されるためには、日本オリンピック・アカデミー(JOA)が主催する「JOAセッション」に参加することが条件となり、その後面接を受けて選抜される。

青年セッションの大まかな流れは、パルテノン神殿などアテネ市内にある数々の遺跡および博物館を見学後、研修施設があるオリンピアに移動し研修施設内でさまざまなプログラムを体験するというものである。青年セッションの参加者は、ギリシャ国内の宿泊および移動はすべてIOAによって手配されている。



写真2 国際青年セッション集合写真

オリンピアの研修施設では、①オリンピックに関する講義、②講義を踏まえたグループディスカッション、③スポーツ活動、④アートワークショップ、⑤ソーシャルイブニングなどのプログラムが展開された。1日の過ごし方は、午前中にレクチャーを行い、昼休憩後、夕方からあるテーマを設定してグループディスカッションを行う。そしてその後、スポーツ活動やソーシャルイブニングで参加者の親睦をはかるといふもので、1日が非常に充実していた。

(1) オリンピックに関する講義

講義の基本テーマは「OLYMPISM」であり、特別テーマとして「FROM ATHENS TO BEIJING」が設定された。このテーマに基づい

て講義が行われ、講師は著名なオリンピック研究者、IOC委員、アテネオリンピック実行委員会委員、北京オリンピック実行委員会委員など、第一線で活躍する方々ばかりであった。

講義の具体的な内容は、「オリンピックの歴史」、「オリムピズムについて」、「オリンピック教育について」、「アテネオリンピックの概要」、「北京オリンピックの概要」、「パラリンピックについて」、「オリンピックと文化」などであった(表1)。レクチャー後のディスカッションでは、演者とフロアとの活発な議論が展開された。特に私が興味深く聞いたのは、国際オリンピック委員会文化・教育委員会のZhenliang HE委員長の講義である。「2008年北京オリンピックの開催を通じた中国文化の認識」と題した講義において、彼は、北京というアジアの都市でオリンピックを開催することは世界的規模で異文化交流および文化の理解等が促進されると指摘し、また、何十億人もの人口を抱える中国でオリンピックを開催することは、それだけの大人数にオリンピック・ムーブメントを体験させる機会を提供することができると主張した。

オリンピックを開催する意義をどのように考え(なぜ開催するのか)、レガシーをどのように設定するかは、オリンピックを開催する上で非常に重要であると考え、そうすることによりオリンピック開催のビジョンがうまれるのではないだろうか。HE委員長の意見をすべて賛成するわけではないが、「世界的規模で異文化交流および異文化理解が促進される」という点で、北京でのオリンピック開催の意義は明確化されたと思う。2016年にオリンピックの招致を目指す東京にとって、招致活動を展開する際に示唆に富むものではないか。

表1 国際オリンピック・アカデミー第47回国際ユースセッション講義一覧

題目 (邦訳)	講師 (国名または所属)
2008年北京オリンピックの開催を通じた中国文化の認識	Mr Zhenliang HE (CHN)
エヴァンゲリス・ザッバスと近代オリンピックの起源	Dr David YOUNG (USA)
ピエール・ド・クーベルタン：スポーツとヒューマニズム	Dr John LUCAS (USA)
オリンピック教育の根源としての歴史的文献	Dr Karl LENNARTZ(GER)
オリンピアと1896年・2004年オリンピックアテネ大会のシンボリズム	Dr Christina KOULOURI(GRE)
ギリシャとオリンピック・ムーブメントに対する2004年オリンピックアテネ大会の重要性	Dr Konstantinos KARTALIS (GRE)
オリンピックゲームズにおけるセキュリティの重要性：2004年アテネ大会と2008年北京大会の概要	Mr Georgios PLAKAS(GRE)
現代中国に対する2008年北京オリンピックの政策的・社会的インパクト	Dr Hai REN(CHN)
中国におけるオリンピック教育プログラムの計画と実行	Dr Dongguang PEI(CHN)
オリンピックゲームズの戦略的計画	Mr John SINER(IOC)
国際的スポーツの国内的経験：2004年アテネの夏	Dr Eleanna YALOURI(GRE)
オリンピックゲームズとレガシーの概観	Mr Spyros CLADAS(GRE)
アテネから北京へ：オリンピックゲームズの組織とマネージメント	Mr Marton SIMITSEK(GRE)
国際的政治情勢の要因としてのオリンピックゲームズ	Mr George PAPANDREOU (GRE)
2004年パラリンピックアテネ大会	Ms Ioanna KARYOFYLLI(GRE)

※講義順に記載した。

(2) グループディスカッション

グループディスカッションでは、講義で行われた内容に基づいて、たとえばオリンピズムやオリンピック教育、オリンピック・ゲームなどに関して、各グループで、発問しあい、それに関する回答を議論し合った。

グループは、まず使用する言語(英語およびフランス語)によって分けられ、それを参加者の出身地域(アジア、アフリカ、ヨー

ロッパ、北中米、南米)が均等になるように細分し、15名前後で構成された。各グループにはコーディネーターが1名つき、議論がスムーズに展開できるようコントロールしていた。グループ内での作業は、まず、テーマに応じた質問を検討し、その後、その質問に対する回答および意見を発言するというものであった。

私はグループ3に分けられた。グループ3

はスリランカ、サウジアラビア、キルギス、アルメニア、リトアニア、ギリシャ、イギリス、フィンランド、ブルガリア、ガーナ、南アフリカ、ニュージーランド、チリ、メキシコ、エルサルバドルという非常に多岐にわたる国々の参加者で構成されていた。

このグループで行ったディスカッションでは、さまざまな意見を聞くことができた。参加者からは、それぞれの母国の実情を背景とした意見が出され、これまでの自分では思いもつかなかった視点に気付かされ非常に参考になった。

たとえば、グループ3では質問のひとつに「オリンピック開催国が、オリンピックの価値を維持しながら大会を継続的に発展させるためには、私たちは何をしなければならないか。」という問を設けた。この問に対して、教育という観点から「オリンピックの価値の認識を高める」や「継続的な反ドーピング運動」などの意見が出されたが、これらの意見を出したのはいずれも先進国の参加者であった。すなわち、オリンピックの開催が現実的にイメージできる国々の参加者が多く発言したものであった。

一方で、現実的にすぐにはオリンピックを開催することは困難であると思われる国の参加者からは、「IOCは、すべての大陸の国々がオリンピックの開催国となれるようにサポートすべきである」とか「オリンピックを開催するためのマネジメントシステムを共有すべきである」という意見が出され、国によって質問の捉え方の違いをみる事ができた。

このディスカッションから、「オリンピック」という共通の事象を考えると、出身地域関係なく共通する部分と出身地域によって異なる部分があることを体感することができた。また最終的には英語を母国語とする参加者が議論の主導権を握ることが多く、自分の語学力のなさに歯がゆい思いもした。



写真3 グループディスカッションの様子

(3) その他のプログラム

スポーツ活動には、サッカー、バレーボール、バスケットボール、テニス、卓球という種目があり、それぞれ好きな種目にエントリーし、毎日夕方から試合が行われた。またこの他に水泳大会、陸上競技大会があり、大いに盛り上がった。私はサッカーを選択し、幸運にも優勝することができたが、この活動のなかで盛んに聞かれたのは“Play fun!”という言葉である。最初は和やかな雰囲気ですポーツを楽しんでいても、勝負になるとつい激しいプレーを行ってしまう。実際、けが人も出てしまったが、参加者と仲良くなるためにはこのスポーツ活動は非常に役立った。スポーツ活動なくしては、これほどまで親密な関係にはなれなかったと思う。

アートワークショップでは、ダンスパフォーマンスを行った。私は、実際にパフォーマンスはしなかったが、即席で創ったパフォーマンスとは思えない完成度の高さに驚かされた。特に、南米やアフリカの参加者は、独特のリズム感があり即興でも踊れる感性はとてもうらやましく感じた。

ソーシャルイブニングとは、参加者が自分の国や地域の文化や伝統を紹介するパーティーである。各国の参加者がさまざまなプログラムを披露し大いに盛り上がった。たとえば、ブラジルの参加者は仲間を集めてサンバを、アルゼンチンの参加者はタンゴを、ガーナの参加者は伝統的なダンスを、台湾の

参加者はカンフーの演舞などを披露した。このパーティーでのパフォーマンスは強制ではないが、どの参加者も気合が入っており、その国の文化や伝統を知るよい契機となった。

私は、このソーシャルイブニングで何を披露するか非常に迷った。過去には、浴衣を着て盆踊りを行ったこともあったらしいが、私は柔道を発表することにした。柔道は2人いないとできないが、日本発祥の国際スポーツである。参加者のなかに経験者は一人くらいはいるだろうと考えた。最大の難点は、私は柔道を専門にやっていないことであったが、事前に特訓をし、これに挑んだのである。

柔道を選んだ理由は、柔道の特性にある。柔道は嘉納治五郎が創設したが、嘉納はアジア初のIOC委員も務めておりそれを紹介しなかった。また、柔道は他のスポーツとの違い、教育的要素が強い。嘉納は、「精力善用・自他共栄」という思想を生み出し、柔道から人間教育を目指したが、私はこの嘉納の思想は、クーベルタンが提唱したオリンピズムと非常に類似していると考え、ソーシャルイブニングでは、この点を伝えたくて柔道を選んだのである。

セッションが始まると、私はソーシャルイブニングのために柔道経験者を探し始めた。すると、ドイツ人男性の柔道経験者を発見した。私はすぐに彼と意気投合し、彼はソーシャルイブニングでの柔道の発表補助を快く引き受けてくれた。柔道は、柔道着がないと技はできない。そこで当初の予定では、彼に私が持参した柔道着を着てもらい私が技をかけるという計画だった。すると、私が柔道の発表をするという噂は次第に広まり、「自分も柔道家であり、ぜひ参加したい」との申し出がどんどん来るといふ予期せぬ自体となった。参加を断る理由もなく受け入れていると、最終的には青年セッション参加者のなかの全ての柔道家が集まり、総勢9名というチームができた。国を挙げると、ドイツ、

オーストリア、アイスランド、ウルグアイ、ブラジル、マリ、韓国、イスラエルという多国籍チームである。ちなみにこの中には女性は3名含まれる。

我々は、「IOA柔道チーム」と名乗り、どのような発表をするか検討を重ねた。すると当初予定していた発表形態から大幅に変わってきた。柔道着は1着しかない。そこで、私が「受け」となり、他の8人が次々と得意技を繰り出すという形になってしまった。日本で猛特訓した数々の技はお蔵入りとなり、私が見せたのは受身のみであった。しかし、一方で柔道と嘉納治五郎の説明は、より濃密にできた。興味深かったのは、国が違っても、柔道の教育的価値は大きいという意識が共通してあるということであった。一般的に国も言葉も文化も違う人々と協力し合っただけのもので作り上げていくことは非常に困難である。しかし、今回は「柔道」という共通なものを介すだけで、仲間意識が広がりすぐに打ち解け、とても楽しく充実した時を過ごすことができた。

3. IOAでの体験から得られたもの

2週間、全く日本語が通じない環境でさまざまな国の人々と交流してきたわけだが、オリンピックに関する知識はもちろんのこと、とても多くのことを学ぶことができた。

最初に感じたのは、外国人も自分と変わらないということである。私にとって外国人は未知なる遠い存在だった。しかし、実際に交流してみると共通する部分が多く見つかりとても近い存在となったのである。それは同時に、外国人と日本人という比較の視点も生れる。日本人的思考や行動、アジア人としての意識など、それまで自分では気が付かなかった自分を発見することができた。そして比較することから、他国の参加者から多くの学ぶべき考え方や行動を見つけれられたのである。重要だと感じたことは、文化の優劣をは

かるのではなく、それぞれを理解するという
ことである。その文化がある背景にはさま
ざまな要因が関連している。ある一部分を
みて善し悪しや優劣を判断することに何の
意味があるのか、そういった短絡的な発想
が多くの偏見を生むのだと思う。日本に
帰国してから、海外のニュース、特に友
人が生活している国のニュースを見る
ときには自然と聞き入ってしまう。自
分の行動範囲が飛躍的に広がった感
じがする。

私はできるだけ多くの参加者と話
したいと思い、意欲的に話しかける
ように努めたが、総じて日本に
対するイメージは好意的であ
った。2016年に東京がオリ
ンピックの誘致を目指している
ことは、ほとんどの参加者が
知っていたが、そこで印象に
残ったことばがある。ガー
ナとアルメニアの参加者と
話をしていたときのこと
であるが、彼らは、自分
たちの国ではまだオリ
ンピックを開催するこ
とはできないこと、現
状ではオリンピックを

開催できる国は非常に限られて
いることを指摘し、東京が
オリンピックを開催するこ
とによって世界に何をもち
たらしてくれるのかとい
う話をしてくれた。この
話を聞いて、私は日本で
生活することの幸運を知
るとともに、オリンピック
を開催することの責任・
使命を実感した。

今回、青年セッションに
参加したことによって、
オリンピックが世界的な
イベントであり、とて
も大きな可能性を持
っていること、そして
スポーツの底知れぬ力
を知る好機となった。

謝辞

国際オリンピック・アカ
デミー第47回国際青
年セッションへの参
加に際し、平成19年
度筑波大学栗原基金
の補助をいただきました。
このような貴重な機
会をお与えください
ましたことに、心から
感謝申し上げます。